

学習時間と学習成果との関係

——信州大学「学習時間調査 2015 年」の結果に基づいて——

李 敏

キーワード：学習時間 成績 GPA

はじめに

今時の学生はサークル・部活動、アルバイトで忙しくて、なかなか勉強しないと嘆く先生はさぞ少なくないであろう。度が過ぎたサークル・部活動やアルバイトは間違いなく大学生の本業である学習に支障が出かねない。しかし、課外活動やアルバイトをしない学生は、本当に勉強しているのだろうか。学業以外の活動を通して、人的ネットワークを構築することはむしろ大学、及び将来のキャリアへの満足度の向上に繋がる。このことは、信州大学の「平成 26 年度信州大学卒業生調査」(李, 2014)を含め、すでに多くの研究に実証された。それでは、学業と課外活動、アルバイトを両立させるためには、各活動をどのように配分すればよいだろうか。本稿は、「学習時間調査」(2015 年度)のデータを用い、授業、授業外の学習、サークル・部活動、さらにアルバイトなどの信大生の各種活動の時間が成績にどのような影響を与えたのかについて分析を行う。この分析を通して、効果的な指導方法を考察することが目的である。

1. 学習時間と学習成果との関係

学習時間が教育の質を保証する重要な指標とされ (Astin, 1993)、その多寡は学生の専門的知識や汎用的技能の獲得を大きく規定する研究が多い (山田, 2012; 金子, 2012)。そのため、大学生の学習行動の成果を標準化された試験で計測する方法が整備されるまでは、学習時間が間接的に学習成果を計る重要指標であると金子 (2013, p.29) が主張する。

しかし、学習時間の重要性について、暗黙のうちに多くの人々に共有されてはいるものの、この論点に関しては、依然として 2 点の議論が残されたままである。1 点目は、同じ学習成果を得るために、費やす時間に関して個人差が存在すること。要領の良い学生が短時間の学習であっても良い成績を収めることができるからである。2 点目は、大学生にとって、本業である学業以外に、自己学習、読書などの自主的学習も成長に繋がるし、サークル・部活動、ひいてはアルバイトは社会関係資本の構築、さらに社会人としての基礎能力の習得にも大きく寄与すること。したがって、学業以外

に、適宜に他の活動を取り入れることも大事である。

前者に関しては、J・B・キャロル (Carroll) が課題達成の度合い (成績) を「学校学習モデル (Model of School Learning)」として提示した。

$$\text{学習率 (テストの成績)} = \frac{\text{学習に費やされた時間 (time spent)}}{\text{学習に必要な時間 (time needed)}}$$

このように、学習者によって、学習に費やされた時間であっても、学習に必要な時間であってもそれぞれ異なるため、分子と分母がともに固定値ではない。したがって、キャロルは授業及び教員の工夫によって、分母である学習に必要な時間を短縮することと同時に、分子を拡大するために、学生一人ひとりの学習時間を確保することの重要性を強調した。キャロルの「学校学習モデル」は、短時間で効率的学習を実現することを説明するよりは、よりよい学習効果を得るためには、学習時間と教育方法の工夫に着目するところが特徴である。実際、前述したように、例外があるものの、学習時間が長いことは、良い成績を収めることに大きく寄与したことは、殆どの先行研究に支持されている。

後者に関しては、溝上ほか (2009) は、学生の学習及び学校生活に関する時間を基準に学生を4つのタイプに分類し、それぞれのタイプの学生の獲得した能力を測定した。その結果、授業内学習、予習復習を含む授業外学習に加えて、アルバイトなどの活動に参加した学生タイプが、コミュニケーション能力、起業能力など汎用的技能の獲得に関する主観評価が高いという結果を得た。山田・森 (2010) の研究においても、正課外の活動が汎用的技能の獲得に寄与できる結果を示した。したがって、「よく学ぶ」と同時に、「よく遊ぶ」ことが大学生の成長には重要な意義を持っていることが言える。その他、学習時間、及び各種活動が成績へ与える効果は、大学の授業の特性、及び専攻の違いに影響されている研究がある (両角, 2009; 藤村, 2012)。

以上のように、学習時間が学習効果へ与えた影響についての先行研究から言えば、以下の課題が指摘できる。①学習時間の内訳をより細分化する課題。例えば、授業時間、授業外学習時間及び授業と関係のない自主的学習の他、部活動・サークル活動、アルバイトなどのような大学生活の重要な一環をなす時間も視野に入れて考察する必要がある。また、②理系、文系などの専攻等の相違によって、学生の学習行動の違いに着目する課題。そして、③学習時間をはじめとする学習行動は、学年によって異なるため、学習と各活動の組み合わせが学習への効果を学年別で分析する課題。さらに、④先行研究においては、獲得した能力という学生の主観評価を学習成果とするものが多く、より客観的尺度の導入が課題である。

先行研究のこのような課題に対し、本論文は、本学が実施した「学習時間調査」(2015年度)のデータを用い、授業、授業外の学習、サークル・部活動、さらにアルバイトなどの信大生の各種活動の時間が成績にどのような影響を与えたのかについて、学年別、学部別で分析を実施する。その際に、学習効果の客観的指標として、前学期のGPAを使用する。

2. 学習時間に関する構造

学習時間に関しては、金子（2013）が学生の学習行動の特徴に基づき、3つの層に分類した。①「拘束的学習」。教員の監督の下に、時間的、空間的な拘束の枠内で行われる学習のことを指す。具体的には「授業」がそれにあたる。②「自律的学習」。時間的、空間的な拘束はないものの、大学の意図的な教育の枠内で、学生自身が行う自律的な学習のことである。授業と関連する予習と復習や、卒業論文・卒業研究がこの部分の学習にあたる。③「自主的学習・活動」大学の教育意図と無関係に行われる学習行動ことを指す。これは、資格試験の準備、読書・自律的思索、さらにサークル・アルバイト・ボランティア活動を考えることができる。①と②は大学教育制度内の学習であるのに対し、③は大学教育制度外の学習と活動と想定できる。

2015年に実施した信州大学「学習時間調査」は、基本的に金子の学習時間構造モデルに基づき、①授業時間（履修科目数による算出）、②自学自習に関する授業外学習時間、③読書、資格学習に関する自主的学習、④サークル・部活動の時間、⑤アルバイト時間という5種類の時間に分けて、調査を実施した。

3. 調査の概要

本稿が使う「学生時間調査」は、2015年12月～2016年1月に信州大学の各学部の1年生～3年生を対象に実施したものである。5,186部の回収数を得て、回収率は79%に達した。調査内容は、上記のように5つに分類された学習時間以外に、学習場所と読書数、さらに学習効果の指標として前期のGPAも調査項目に取り入れた。調査の概要は表1のとおりである。

表 1 調査の概要

	1年次				2年次			3年次			合計		
	配布数	回収数	回収率		配布数	回収数	回収率	配布数	回収数	回収率	配布数	回収数	回収率
人	172	126	73%	(94%)	160	68	43%	169	86	51%	501	280	56%
教	290	265	91%	(90%)	290	232	80%	285	195	68%	865	692	80%
経	194	162	84%	(70%)	191	158	83%	255	168	66%	640	488	76%
理	230	170	74%	(83%)	208	161	77%	222	138	62%	660	469	71%
医	129	102	79%	(79%)	130	74	57%	122	108	89%	381	284	75%
保	155	136	88%	(78%)	153	137	90%	163	142	87%	471	415	88%
工	502	418	83%	(80%)	493	435	88%	619	447	72%	1614	1300	81%
農	184	169	92%	(61%)	179	152	85%	190	145	76%	553	466	84%
織	303	245	81%	(90%)	281	266	95%	321	281	88%	905	792	88%
合	2,159	1793	83%	(82%)	2,085	1683	81%	2,346	1710	73%	6590	5186	79%

注：（ ）の中は2014年度の回収率

この調査は、学習時間の実態に着目したコンパクトな調査であり、先行研究の中で多く取り扱われるような学生の獲得した能力、意識などの項目が含まれていないところが本研究の限界と言える。しかし、GPAを聞くことによって、時間の使い方の効果を客観的に計測することができることは、本研究の大きな特色と言える。

4. 学習及び各種活動の時間

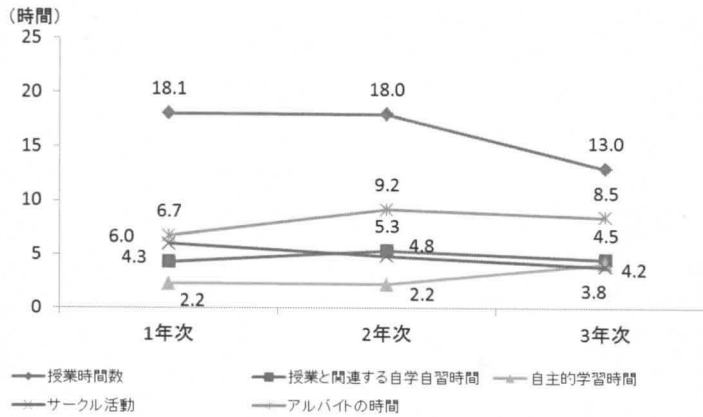


図 1 一週間あたりの各種活動の時間 (全学)

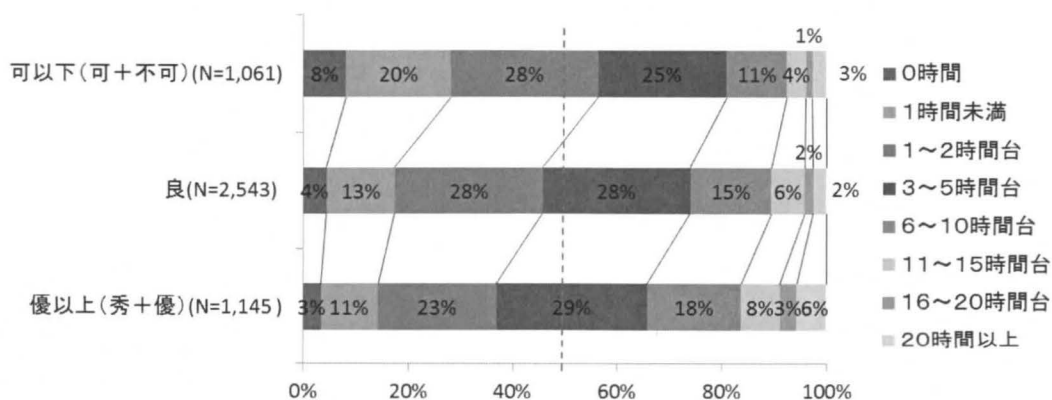
表 2 各種活動の時間×学部×学年

		制度内学習		制度外学習・活動		
		授業時間数	授業と関連する自学自習時間	自主的学習時間	サークル・部活動	アルバイトの時間
人	1年次	20.9	3.9	2.8	5.6	6.0
	2年次	20.3	5.9	2.4	4.4	7.4
	3年次	14.4	7.1	5.5	2.8	8.4
	合計	18.8	5.4	3.6	4.4	7.1
教	1年次	18.4	3.1	2.4	7.2	7.5
	2年次	22.7	4.6	1.7	5.0	10.3
	3年次	17.2	3.4	4.6	3.3	9.6
	合計	19.5	3.7	2.8	5.4	9.0
経	1年次	17.2	4.0	2.5	6.5	8.8
	2年次	13.1	3.4	2.8	4.3	11.0
	3年次	9.5	3.6	7.3	2.5	9.3
	合計	13.2	3.7	4.2	4.4	9.7
理	1年次	21.7	6.0	2.2	5.0	4.9
	2年次	16.7	6.8	3.1	4.4	8.5
	3年次	11.9	6.4	4.8	4.0	7.5
	合計	17.1	6.4	3.3	4.5	6.9
医	1年次	19.7	6.1	1.3	9.1	3.0
	2年次	13.4	8.3	3.1	5.8	4.7
	3年次	16.0	5.0	2.8	7.3	3.8
	合計	16.8	6.3	2.4	7.6	3.7
保	1年次	19.5	4.9	1.8	6.3	6.5
	2年次	17.1	6.0	1.6	5.9	9.2
	3年次	12.4	7.7	3.1	2.5	6.3
	合計	16.6	6.2	2.1	4.8	7.3
工	1年次	15.9	4.3	2.4	4.8	7.2
	2年次	18.1	6.1	1.9	4.7	8.7
	3年次	14.1	4.4	3.1	3.6	9.4
	合計	16.0	4.9	2.5	4.3	8.4
農	1年次	18.1	3.8	2.5	6.5	7.2
	2年次	19.2	4.8	2.3	5.4	8.9
	3年次	8.3	2.6	6.7	4.6	7.5
	合計	15.4	3.8	3.7	5.5	7.8
織	1年次	16.4	4.1	2.0	5.2	6.6
	2年次	17.6	3.9	2.1	4.4	10.1
	3年次	12.5	3.7	2.6	4.7	9.6
	合計	15.4	3.9	2.2	4.7	8.9
合計	1年次	18.1	4.3	2.2	6.0	6.7
	2年次	18.0	5.3	2.2	4.8	9.2
	3年次	13.0	4.5	4.2	3.8	8.5
	合計	16.4	4.7	2.9	4.9	8.1

信大生は1年次から3年次にかけて、各種活動の平均時間を見てみると、学年が上がるにつれ、授業時間が徐々に減るのに対し、授業と関連する自学自習の時間が2年次に微増し、3年次に微減に転じる。一方では、自主的学習時間が増加する傾向にある。サークル活動は1年次、アルバイトは2年次がピークであるという傾向が見られる(図1)。

しかし、学部別でみると、専攻による特徴が一目瞭然である(表2)。総じて言えば、理学部、医学科、保健学科に関しては、授業による拘束時間と自律的な学習時間(授業と関連する自学自習)がいずれも長い。人文、経済、教育といった人文・社会系は3年次に自主的学習時間が増加する傾向がある。同じ人文・社会系であっても、人文学部は3年次に授業時間が減るものの、授業と関連する自学自習の時間と自主的学習時間が大幅に増加する特徴がある。一方、経済学部は、3年次の授業時間数の減ったかわりに、自主的学習時間の増加が目立つ。恐らく資格試験の準備だろうと推測される。その他、医学系のサークル・部活動時間が長いことに対し、経済、繊維学部の学生はアルバイトにより多くの時間を費やしているという特徴がある。これは東京大学大学政策・経営センターが2007年に実施した「大学生調査」(標本数46,075)の結果と若干異なる。東大の「大学生調査」では、理系と保健関係では、授業時間は長いものの、自律的学習時間、読書などの自主的学習時間は、他の領域と殆ど変わらない。したがって、領域別の学習時間の差は、主に授業による拘束時間の差に起因するものだと結論づけている(金子, 2013, p.36)。このような相違が生じたのは、信大独自の特徴と考えられるほか、全国調査と比べると、より細部にわたって分析できたという本研究のデータの質の良さと言えよう。

5. 各種活動時間と成績の関係



注: ***<0.1%、**<1%、*<5%、+<10%、以下同

図2 授業と関連する自学自習×成績***

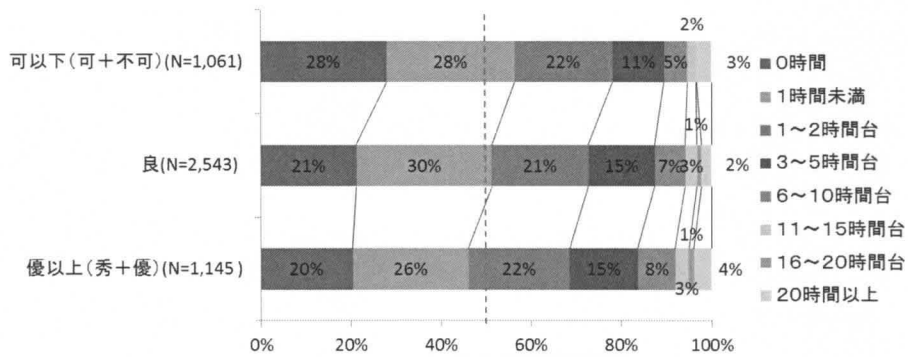


図3 自主的学習×成績***

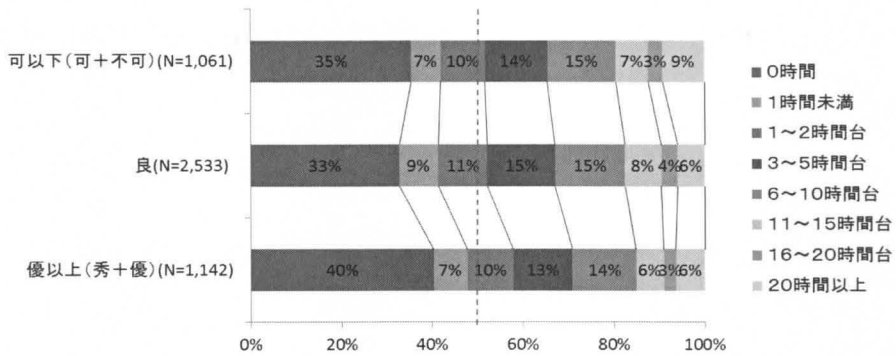


図4 サークル・部活動×成績***

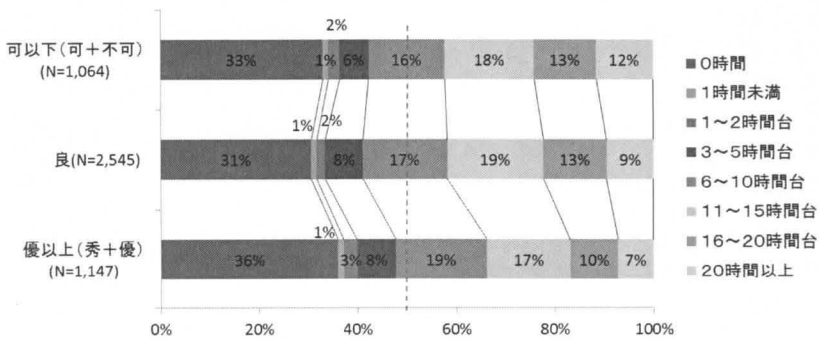


図5 アルバイト×成績***

成績別¹⁾で学生の活動を見てみると(図2～図5)、成績が優秀な学生の方は授業と関連する学習、自主的学習の時間が長い傾向がある。一方、成績不振の学生(可以下)はサークル・部活動の時間が若干長いものの、その他の成績グループ(秀、優、良)

の学生との間には大差が見られない。注目すべきは、成績不振者の中で、サークル・部活動をしていない学生が35%（実数376名）を占めていることである。同様に、成績が可以下の学生の中で、アルバイトをしていない学生が33%（実数351名）を占めている（図5）。さらに成績が可以下でサークル活動もアルバイトもしていない学生は、実数では133名にのぼった。ここでは、成績不振者の中で課外活動もアルバイトもしていない学生を「孤独な学生」と呼ぶ。

このように、大学生としては、地道な学習はよい成績を収める王道である一方、それ以外の授業と関連のない自主的学習、サークル・部活動、及びアルバイトは必ずしも成績に悪影響を及ぼすとは限らないということが読み取れる。先行研究でも示されているように、むしろ適宜に制度外の学習と活動を行ったほうが、コミュニケーション能力、汎用能力を大きく促進できる。ただし、いわゆる適宜というのは、専攻と個人の能力にも左右されることなので、正確に示すのは極めて困難である。したがって、次節では、授業外学習時間とサークル・部活動+アルバイトといった学外の活動との組み合わせに応じて、学生を4つのタイプに分類したうえで、それぞれのタイプの学生の成績の相違を考察してみる。

6. 各種活動時間と成績の関係

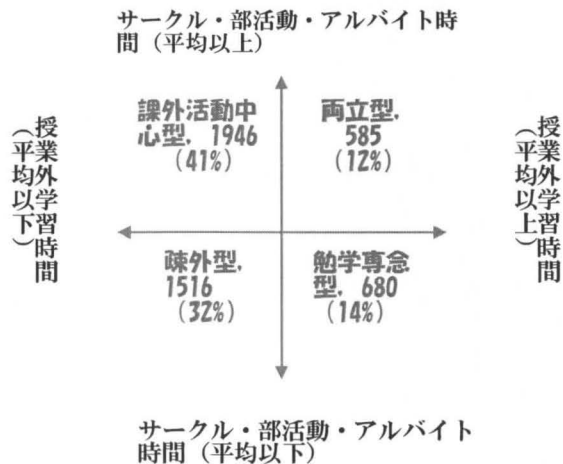


図6 各種活動による学生の分類

ここでは、授業外学習時間とサークル・部活動・アルバイト時間という各種活動の時間の長さによって、学生を4つのタイプに分類してみた（図6）。授業外学習と各種活動の平均時間を基準に、授業外学習時間と各種活動時間の平均をいずれも上回る学生を「両立型」（12%）と呼び、授業外学習時間のみが平均を上回る学生を「勉学専念型」（14%）と名付ける。一方サークル・部活動、アルバイトなどの各種活動が平均を上回る学生を「課外活動中心型」（41%）で、両方の時間が平均を下回る学生を「疎外型」（32%）と名付ける。授業外学習時間が平均を下回る「課外活動中心型」と「疎外

型」の学生を合わせてみると、全体の7割以上も超えている。

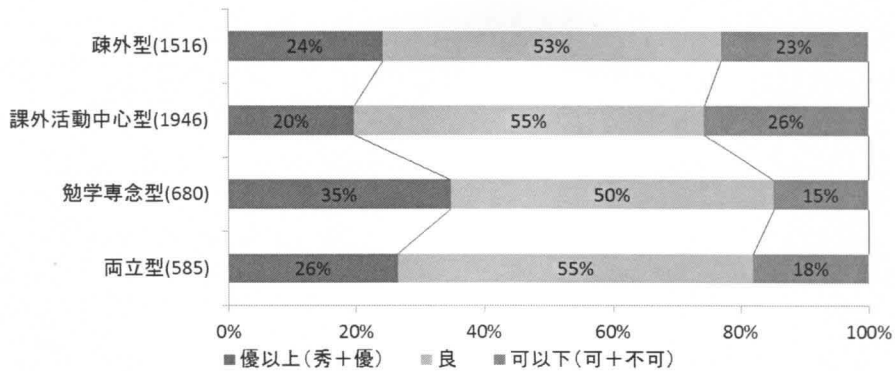
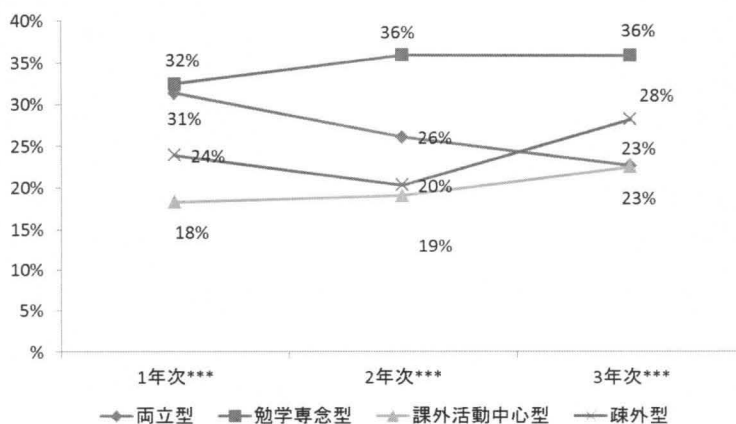


図 7 学生タイプ×成績***

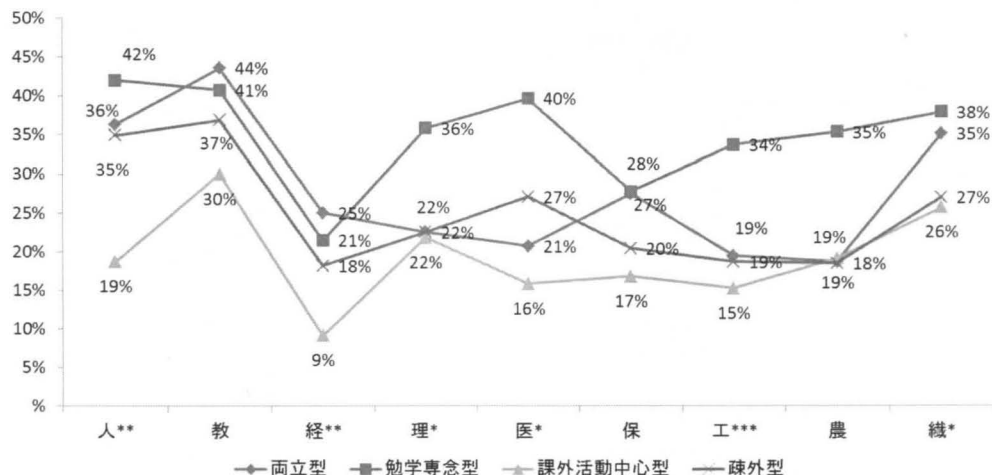
図7のように、学生のタイプ別で学生の前期のGPAを見てみると、学業により時間を注ぐ「勉学専念型」の学生の成績が最も優れている（優以上 35%）。それに対し、サークル・部活動、アルバイトにより熱心である「課外活動中心型」の学生の中に成績が振るわない学生が若干多い（以下 26%）。このことは世間の印象と見事に一致している。注目すべきは、学習と各種活動の両方に平均以上の時間を注ぐ「両立型」の学生は、すべての活動に興味を示していない「疎外型」の学生より、大差はないものの、成績が若干上回ることである²。また「両立型」の学生は、「勉学専念型」の学生と比べ、成績が若干下回るが、大差は見られない。要するに、「学習上手」、「遊び上手」ということは十分ありうるということが言える。



注：成績が「優以上（秀+優）」の割合

図 8 学生タイプ×成績×学年

学年別で各タイプの学生の成績の変化を見てみると、「勉強専念型」の学生の中に、3年間一貫して成績優秀者が最も多い。一方、「両立型」の学生の中には、1年次の時に成績が優秀以上の学生が31%に達し、「勉強専念型」の32%と匹敵できる程度であった。しかし、学年が上がるのにつれて、「両立型」の学生の成績優秀者が若干減少する傾向にある(図8)。大学の在学期間中に、メリハリのある学生生活設計が必要であろう³。



注：成績が「優以上 (秀+優)」の割合

図9 学生タイプ×成績×学部

さらに、学生のタイプと成績の関係について、学部別で見ると、教育学部、経済学部においては、「両立型」の学生の中に成績の優秀者が若干多いものの、全体としては、「勉強専念型」>「両立型」>「疎外型」>「課外活動中心型」という傾向がいずれの学部に見受けられる(図9)。したがって、成績が授業外の学習時間によって規定されると結論付けても妥当であろう。

7. 成績の決定要因

表3は、成績を従属変数にし、各種活動の時間を独立変数にして、学年ごとで重回帰分析を行った結果である。

第1に、1年次と3年次の時、履修科目数が多いことはよい成績を収めることに支障が出るのが分かる。高校と比べ、1年次の学習環境が大きく変わるゆえ、過剰な科目の履修は、適切な授業外学習時間の確保が困難になり、成績に悪影響を及ぼしたからであろう。一方、3年次は、卒業論文、卒業研究の準備に加え、就職活動も開始したため、授業外の学習時間が確保できないことが原因だと推測できる。学生の学習時間を十分に確保するためには、適切な授業科目の履修指導が必要である。

表 3 成績の決定要因

	1年次		2年次		3年次	
	標準化されていない係数B	標準化係数ベータ	標準化されていない係数	標準化係数	標準化されていない係数	標準化係数
定数	4.172***		4.382***		4.333***	
履修科目数（今学期一週間）	-0.24	-0.096***	-0.030	-0.118	-0.27	-0.115***
授業と関連する自学自習時間	.027	0.151***	.026	0.128**	.012	0.072*
自主的学習時間	-0.003	-0.015	.011	0.063	.008	0.050
サークル・部活動時間	-0.002	-0.0143	-0.001	-0.01	-0.017	-0.121***
アルバイト時間	-0.004	-0.037	-0.002	-0.016	-0.008	-0.071**
平均読書数	.030	0.047+	.045	0.065	-0.029	-0.042
N	1793		2085		2346	
調整済み R2 乗	.336		.347		.389	
F値	9.76***		4.743***		9.752***	

注：***<0.1%、**<1%、*<5%、+<10%

第2に、すべての学年で、履修科目数をコントロールしたうえでも、授業と関連する自学自習の時間数が成績を強く規定している特徴が見受けられる。やはり良い成績を収めるには、地道な勉強が欠かせない。特に係数から言えば、1年の方が最も大きく、1年の時から学習習慣の定着の大切さをうかがえる。

第3に、サークル・部活動、アルバイトの時間が1年次と2年次の時に、成績に有意な影響を示しておらず、3年次のみ成績に負の影響を与える。これは極めて興味深い結果である。図4、及び学生のタイプ別の活動（図7）からの分析で説明したように、サークル・部活動、アルバイトを一切しないからといって、学業に専念するとは限らないし、学業と課外活動を両立する「両立型」の学生や、課外活動に多くの時間を費やす「課外活動中心型」の学生にも成績優秀者がいる。ただし、表3が示したように、1年次と2年次の間は豊富多彩な大学生生活を存分に体験することが大事であるが、ずっとそのような生活を続けるならば、中だるみになりかねないので、3年次になると勉強に切り替える必要があると解釈できる。これは図8と同じ結果である。

第4に、読書の時間は1年次のみ、10%程度で成績と有意な関係を示している。この結果は、読書の効果が限られているという解釈よりは、読書の効果が直接学業成績に反映せずに、むしろ学生の汎用的能力、及び卒業後の能力の獲得に効果があると解釈すれば妥当であろう。読書の効果については、例えば、濱中（2009）の工学系の大学院生の調査で、所得に有意に影響するという調査の結果がある。また、李（2017）は、高専卒業者の調査に対する分析で、在学時及び卒業後思想教養書、専門書を読む者が、転職する際に興味のある職場・職務を得ることを促進するという研究結果がある。したがって、読書の効果については、在学中の成績という短期効果より、読書を通して、幅広い教養知識、視野の獲得、及び自主的に学習する習慣の習得に着目すべきだと考えられる。

8. まとめ

信州大学が実施した「学習時間調査」(2015年度)のデータを用い、授業、授業外の学習、サークル・部活動、さらにアルバイトなどの信大生の各種活動の時間と成績との関係について分析を試みた。その結果、下記の4つの知見にまとめられる。

1) よい成績を収めるためには、地道な学習が欠かせないことはいまでもないが、学習とサークル・部活動、アルバイトなどの各種活動とも両立できるはずである。実際、信大生の多くがすでにその実践をしていることが今回の調査で読み取れた。本研究の学生のタイプ別の分析では、「勉学専念型」の学生の成績が他のタイプの学生より上にあるという結果があるものの、成績以外の能力の獲得、例えば先行研究に示されたようなコミュニケーション能力、汎用能力、さらに大学への満足度などに関しては、「両立型」などの類型の学生が「勉学専念型」を上回ることが推測される。今回の調査は、こうした項目が含まれていないため、上記の結論は推測の域を出ないが、その可能性が十分あり得る。この分析は、今後の課題とする。

2) 学習と充実した大学生生活を両立するためには、学生が計画的に学習と各種活動の時間を配分する必要がある。具体的な配分方法は、個人差があると同時に、専攻による相違も存在することを指摘したい。データの制限で、各専攻のモデル的な時間の配分方法を提示することができなかった⁴ことが課題ではあるが、同じ専攻であっても、学年によって時間の配分方法が成績に影響を与える結果が興味深い。1年次と2年次に、学習習慣の定着と大学生活を存分に楽しむのは重要であろうが、3年次に再び学習に専念する必要がある。

3) 課外活動に一切参加しない成績不振の「孤独な学生」が一定数にのぼることが、今回の調査で明らかになった。このような学習支援のニーズがあるものの、自ら進んで学習支援の活動に参加せず、かつサークル・部活動も、アルバイトもしないという学校生活にコミットできない学生の存在を問題提起したい。いかにこのような「孤独な学生」を早期に発見し、適切な指導を行うか。また、どのように支援を与えればよいかが課題である。

4) 読書習慣に関しては、1年次のみ、成績に有意な関係を示しているが、分析の部分で指摘したように、読書は短期効果より、生涯にわたる本人のキャリアアップという長期効果を促進する重要な要因である。したがって、今後は学生の卒業時の成績と各種知識と能力の獲得、さらに卒業後のキャリアや、新たに身につけた各種知識と能力などのデータを補完できれば、読書の長期効果を測定することが可能である。

以上の調査結果に基づき、下記のインプリケーションを提示できると考えられる。

1) 大学生の本業である学習の質を維持しながら、大学生生活を多彩なものにするためには、①適切な授業科目の履修指導、②授業外学習時間の確保、③学習の中だるみを防止するように、課外活動の適切な時間配分に対する指導が必要である。

2) 「孤独な学生」に関しては、成績に応じてそのような学生を見付け出し、かつ支援を与える方法が考えられる。信州大学は、毎学期GPAを用いて、学生相談制度を設けている。この制度は「孤独な学生」を発見する最適なチャンスだと評価できる。ま

た、それらの学生の学習支援の問題については、「孤独な学生」を含め、すべての学生を巻き込んだアクティブラーニングが有効であろう。このような実践は本学ですで行われている。2012年度より開講した「大学生基礎力ゼミ」は、グループワークなどのアクティブラーニングの手法をフルに用い、友人、先輩、教職員と協力的な関係を結び、助け助けられながら、大学における種々の課題を乗り越えていく先駆的な試みを行っている。このように、「孤独な学生」を見つけ出すのと同時に、学生・教員すべてを巻き込むアクティブラーニングを通して、「孤独な学生」を作り出さない環境の整備を併行して進めるのも効果的なのではないだろうか。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 C「初年次セミナー受講生の『ふりかえり』を基盤とした学習支援のあり方に関する研究」(代表者 加藤善子 2016 - 2019, 課題番号 16K04463)の一環として行ったものである。

注

¹ 成績の分け方は下記の通りである。GPA 4=秀、GPA 3.33~3.99=優、GPA 2.67~3.32=良、GPA 2~2.66=可、GPA 1~1.99=不可、GPA 0~0.99=不可

² GPA の平均値から言えば、「両立型」の学生の成績が「疎外型」の学生より上回る。

³ 3年次になると、「疎外型」の学生の成績が急に上がった結果がある。内訳をみると、この傾向は、人文、教育、医学部の「疎外型」の学生の中で突出して目立つため、全体の平均値が高くなったことにつながった。

⁴ 本調査は、学習及び各種活動の時間を実際の実数ではなく、「0 時間」、「1 時間以下」「1 時間~2 時間」のように、時間帯で聞いた。

参考文献

1. Astin, A.W.(1993). *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*, Phoenix, Arizona: ORYX Press.
2. Carroll, J. B. (1963). *A model of school learning*, Teachers College Record, 64, 723 - 733.
3. 小方直幸 (2008) 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』第11集, pp. 45-64.
4. 金子元久 (2012) 「大学教育と学生の成長」, 『名古屋高等教育研究』 (12), pp. 211-236.
5. 金子元久 (2013) 『大学教育の構築』玉川大学出版部。
6. 畑野快, 溝上慎一 (2013) 「大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討」『日本教育工学会論文誌』 (37), pp. 13-21.
7. 濱中淳子 (2009) 『大学院改革の社会学—工学系の教育機能を検証する』東洋館出版社。
8. 濱中淳子, 山村滋, 鈴木規夫 (2014) 「高校一年次の学習時間—そのばらつきと背景を探る」『大学入試研究ジャーナル』第24号, pp. 15-20.
9. 藤村正司 (2012) 「大規模学生調査から学習成果と学習時間の構造を掴む」『大学論集』第44集, pp. 1-17.
10. 朴澤泰男 (2009) 「一橋大学における学生の時間使用—『全国大学生調査』を用いた研究ノート」, pp. 73-86.

-
11. 溝上慎一（2009）「大学生の過ごし方から見た学生の学びと成長の検討：正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」京都大学高等教育研究（15），pp. 107-118。
 12. 溝上慎一，間玲子，山田剛史，森朋子（2009）「学習タイプ（授業・授業外学習）による知識・技能の獲得差異」『大学育学会誌』（31），pp. 112-119。
 13. 山田剛史，森朋子（2010）学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割」『日本教育工学会誌』（34），pp. 13-21。
 14. 山田礼子（2012）『学士課程教育の質保証に向けて—学生調査と初年次教育から見えてきたもの』東信堂。
 15. 李敏（2014）「平成 26 年度信州大学卒業生調査」報告書，信州大学高等教育研究センター <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/result/docs/houkokusyo.pdf>（2017年1月16日アクセス）。
 16. 李敏（2017）「不本意からの脱却—不本意進学者及び転職者の満足度を高めるためには—」高専研究報告「KOSEN 教育の光と影」報告資料，2017年1月7日。
 17. 両角亜希子（2009）「大学生の学習行動の大学間比較—授業の効果に着目して」『東京大学大学院教育研究科紀要』第49巻，pp. 191-206。

（信州大学 総合人間科学系 高等教育研究センター 講師）

2017年1月12日受理 2017年2月1日採録決定

(要 約) 学習時間と学習成果との関係

——信州大学「学習時間調査 2015 年」の結果に基づいて——

李 敏

本論文は、「学習時間調査」(2015 年度)のデータを用い、授業、授業外の学習、サークル・部活動、さらにアルバイトなどの信大生の各種活動の時間が成績にどのような影響を与えたのかについて分析を行う内容である。この分析を通して、効果的な指導方法を考察することが目的である。その結果、下記の 4 つの知見にまとめられる。

1) よい成績を取めるためには、地道な学習が欠かせないことはいうまでもないが、学習とサークル・部活動、アルバイトなどの各種活動とも両立できるはずである。

2) 学習と充実した大学生生活を両立するためには、学生が計画的に学習と各種活動の時間を配分する必要がある。具体的な配分方法は、個人差があると同時に、専攻と学年による相違も存在する。1 年次と 2 年次に、学習習慣の定着と大学生生活を存分に楽しむのは重要であろうが、3 年次に再び学習に専念する必要がある。

3) 課外活動に一切参加しない成績不振の「孤独な学生」が一定数にのぼることが、今回の調査で明らかになった。

4) 読書習慣に関しては、1 年次のみ、成績に有意な関係を示しているが、分析の部分で指摘したように、読書は短期効果より、生涯にわたる本人のキャリアアップという長期効果を促進する重要な要因である。

以上の調査結果に基づき、下記のインプリケーションを提示できると考えられる。

1) 大学生の本業である学習の質を維持しながら、大学生生活を多彩なものにするためには、①適切な授業科目の履修指導、②授業外学習時間の確保、③学習の中だるみを防止するように、課外活動の適切な時間配分に対する指導が必要である。

2) 「孤独な学生」に関しては、成績に応じてそのような学生を見付け出し、かつ支援を与える方法が考えられる。また、学生・教員すべてを巻き込むアクティブラーニングを通して、「孤独な学生」を作り出さない環境の整備を併行して進めるのも効果的である。